
怪奇学園心霊調査部

來澄 和樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怪奇学園心霊調査部

【Nコード】

N7583K

【作者名】

來澄 和樹

【あらすじ】

格好良いやつが声を掛けてきたかと思えば……

心霊調査部？

オカルト？

私に守護霊が？

不思議なことが多い学校で、謎や噂を調査、解決！

オカルトホラーラブストーリーー

つつくりさん

靈感は、あまり……ない方だ

見えないし、聞こえない。勘が良いのか、よく思った通りになったり、そういうのがあると、感じることはある

私は根性なしで、怖がりだ。だがプライドだけは無駄に一人前で、怖いくせに平気なフリをする。映像ではてんでダメだが、文章ならまだ平気だ

進学するにつれ、靈感の強い人や霊媒体質の友人が増えた。そういう話になると、体験談や都市伝説が口々に話され、盛り上がる。そして、肌寒さを感じて強制終了させるのだ

高校二年の春。クラス替えて同じクラスになったやつと、仲良くなった

やつが声を掛けてきたきっかけは、私に憑いている守護霊を見たからだ

やつは見える人なのだ

守護霊がいることや、その霊が意外と凄いタイプのものだと、その頃初めて知った

この学校がかなりの心霊スポットだということも、同様だ

「普通の七不思議とかいう問題じゃないしねー、このガッコー」

「見えるのか？あれも」

やつが目線だけ、教室の天井に向けて聞いてくる。私は、薄らと見えるソレを視界に入れた。やつは、それだけでわかってくれる。見えていないと、見つめることは出来ないからだ

やつに出会ってから、私は見えるようになった。力の強い人の近くにいと、影響を受けるといのは本当らしい。強い霊なら、はつきりと見える

それに比例してか、守護霊の力も強くなった……らしい

「こつくりさん？」

「女子ってそういうの好きだよな」

最近、こつくりさんが流行っているのは知っていた。やろうとは思わないが

「それと、この欠席の多さ、関係してるっての？凄い噂だね」

こつくりさんをした女子達が、次々に長期欠席をしている。学級閉鎖になりそうな勢いだ

「噂かどうか、確かめようぜ」

「……私も？」

「当たり前だろ？オレら心霊調査部の出番だ」

「……マジ？」

心霊調査部とは、この学校にある部活の一つだ。オカルト研とか言うやつもいるが、まあ似たようなものだ

やつが部長で私が副部長。今や同好会になるのでは、と噂のこの部は今二人でなっている

この部に入ったのは好奇心もあったが、それよりもやつがしつこく勧誘してくるからだ

まあ、私に憑いてる守護霊にしか興味ないんだろうけど

普通にしたら格好良い、気さくな友人なのに。この手の話となると、手に負えない

顧問の先生は名ばかりで、今夜調査をしたいと言ったら職員室にいるから適当に行ってこいとだけ告げられた

職員室にいてくれるだけ、ありがたい話だ

「三年の教室に行くぞ」

私らより一つ下の階にある、上級生の教室。こっくりさんは、三年の女子が流行らしたらしい

「普段は近づかないから、わからなかったけど……これ、本物じゃ……」

「呼ぶだけ呼んで、終わらせなかったのか……バカなことを」

「じゃあまだこの学校に?!」

暗く淀んだ空気に、頭が痛くなり耳鳴りが痛く響く。嫌な汗が背を伝うのが気持ち悪い

「ちょっと、静かにしてろ」

その言葉にムツとして口を開きかけたが、やつがそう言った意味がわかり口を閉じた

「……声？」

「何か言ってる……」

聞き取れないが、何かが確かに聞こえた。やつには聞き取れていないのかもしれない。私は、やつの方を見た

気付いたやつが、首を振る。やつにも聞き取れないらしい

「どうするの?」

「大問題だな。放っておくには危険すぎる。お前に憑いてる守護霊が傍にいて、これだけ気分が悪くなるんだ。普通なら授業どころじゃねえよ」

「……そっか」

「……危険もあるかもしれないけど……こっくりさんをやるぞ。いるものは持ってきたからな」

……
いつも思うけど、私を巻き込むことに迷いが無いのは何故なんだ

半紙に唾液を混ぜた墨で文字を書いていく。鳥居は血文字。どこで手に入れたのか、やつは御神酒を取出した

「あ、窓開けとかねえとな。南ってどっちだ？」

「西日がいつもキツいの向こうだけど……」

「じゃあこっちだな」

どこか楽しそうなやつは、財布から十円を取出し、置いた

何が楽しくて、やつと十円玉に指を置きこっくりさんと呼ばねばならんだ

しかも勝手に十円玉は動いていくし。最初は動くことが、ちょっと楽しかったが『死ぬ』と言われた時は、ムカついた

「帰ってもらおうか……こっくりさん、こっくりさんお帰り下さい」

答えは『いいえ』。再度お願いした

「お・み・き……酒？」

酒を渡せば帰ってくれるらしい。普通なら用意してないものだ。先輩達は、パニックになっただろう

空気がすうつと澄んだ気がして、意識を一瞬失った。本当に一瞬で、気付いた時にはやつが机の上に突っ伏していた

やつを起こして、半紙をビリビリに破いた。先生に軽く挨拶をして、早々に学校を出た。十円玉はコンビ二で使った

「帰ったんだよね……？イマイチよくわかんないんだけど」

「帰ったよ。もういなくなってた」

それは確かに、私にもわかったことだ

あの時見えていたのは、狐のようなものだった

私は、感じていた疑問を口にした

「どうやって帰ってもらったんだっけ？」

「……さあな」

「その部分が、思い出せないんだよね」

「オレもだ。どうせ酒とかじゃねえ？供物に値するものを持ってっ

たんだろ。あの場から消えていたものを知ることができねえ。その記憶も、それが存在していた証拠も消えるからな」

酒と言われて、そうだと思った。酒があったような気がする

帰り道の別れ際、やつは怖いことを言い残しやがった

「もしかしたら供物は人間の魂で、オレ達は三人でこっくりさんをしてたのかもしれない。じゃあまた明日な！」

「……おいおい」

それって神隠し?! 酒じゃなかったの!? 颯爽と去ってくれるなよ!

それから何事もなかったかのように、生徒は学校に戻ってきた。前より教室が広くなったように感じた。それは気のせいか……

神隠しか……

七不思議

「これから同じクラスだな、宜しく。因みに、部活入ってる？オカルトに興味ないか？」

「は？」

これが私とやつの出会いだった

「あの時、好奇心で軽々しくついていくんじゃなかった……」

「何か言ったか？」

「別にー？」

「ふーん……あ、ここだ。噂のテニスコート」

私とやつは、とある噂を聞き付けて校内にあるテニスコートに来ていた

やつが初対面の私に声を掛けてきたのは、私に憑いている守護霊に惹かれたからだ

それからしつこく勧誘され、好奇心も相まって、やつが部長である心霊調査部に入部したのだ

そして、部活動の一環でこのテニスコートに来た

「この下には、お墓が……」

「昔、この辺には村の集落があつて、ここはその村の裏手にあたる山があつたらしい」

「ふーん……」

そしてそんなテニスコートに、昔からとある噂がこの学校にはあった

「新月の夜、このテニスコートの左から三面目には近づくな、か」

「七不思議つてやつだよな」

「そんなもんが未だにあるとは……」

「さ、行こうぜ。噂の三面目のテニスコートに」

真っ暗なテニスコートに、私達は歩きだした

「何もないよ？」

「新月の夜……三面目のテニスコート……状況はバッチリなんだけどなー」

テニスコートの上を、暗さに慣れた目で歩き回る

「やっぱ、ただの昔話だったんだよ。だいたい、近づくな、だけじや何が起るかわかんないし」

「……そうなら、いいけどな」

「えっ？」

やつが私の方をじっと見ながら言う

意外に格好良い顔が、私を見つめた

「なっ、な、な、何？」

「守護霊の様子がおかしい。オレから離れるなよ」

「へ？あ、うん……」

何だ？この状況は

夜の学校に二人きりのこの状況で、オレから離れるんだあ？

っだ！煩いよ、私の心臓！ドキドキなんかすんなって！

「あ、もしかして左からって、向こうから見ての左かもよ？」

私はドキドキを紛らわせるため、そう言いながら反対側のコートへ駆ける

「あ、そっか……じゃなくて！バカ！離れるなって言ったじゃねーか！」

やつの声が届き、足を止めた時にはもう遅かった

私が立っていたのは、丁度例のテニスコートだったのだから

「そこから離れる！」

やつが言いながら走ってくる

だけど、私は動けなかった

「あ、足が……」

金縛りにあったかのように、体が痺れて動かない。変な音も聞こえてきて、冷や汗が伝う。声も出しているつもりだが、出ているかはわからない

そのまま私は意識を失った

「ちょっと、どこ行くの？」

「部室だよ。霊に興味あるんだろ？」

「そうだけど……」

今日会ったばっかなのに、馴々しいなあ。クラス替えて同じクラスになって、席が近かっただけなのに……何で？

「着いたよ。ようこそ、心霊調査部へ。オレが部長だ」

「ふーん……」

ただの教室だ

「霊、見えるか？」

「え、いや……いてるのはわかるけど」

「じゃあ、その守護霊は？」

「は？」

守護霊？何言ってるの、こいつ

「気付いてないのか……。かなり凄いのが憑いてるのに」

「憑いてるって……」

私に守護霊が？！

「憑いてるよ、その肩に。可愛い女の子の守護霊が。髪は長くて、幼稚園児くらいかな。目の下に逆三角形のあざがある……」

あざ？幼稚園児？それって……

「お、お姉ちゃん……？お姉ちゃんがいるの？」

「キミのお姉さんは知らないけど、そこにいるよ？」

誰にも言ったことのない、私すら会ったことのない姉。私が生まれる前に亡くなってしまった、写真でしか知らない姉の特徴を家族以外の人が口にするはずがない

この人、本当に見えてるんだ……！

「オレさ、キミのこと気に入っちゃったんだ」

え？気に入っちゃったって……でも今日会ったばっかなのに

「守護霊なんて、滅多に出会えないし！どうだ？一緒に噂や謎を解明しねえか？」

「……………」

気に入ってたって……私じゃないのね！

「……知らないよ、勝手にやってれば！？」

「あ、おい！待ってって」

それから毎日毎日勧誘してきて、やつのせいで段々靈感強くなるし、心霊スポットにつれ回されるし……迷惑とも思いながらも、私の好奇心がかなり喜んだのも事実で……結局折れちゃったんだよねー

本当、友達なら良いやつなのに

いつも二人でいるから、周りには誤解されてるし

そんなんじゃないっつーの！

ん？何か、聞こえる

誰か……呼んでる？

「……い、おい！大丈夫か？」

「う、ん……？」

夢？四月の時の……っ！頭痛い……

私が目を開けると、やつの必死な顔がそこにはあって。私は痛む頭を押さえながら、起き上がった

「大丈夫か？」

「頭痛い……ここは……テニスコート？一体私どうなったの？」

「そんだけ言えたら大丈夫そうだな。とりあえず、行くぞ」

手を引っ張りながら歩いていくやつに黙ってついていく

カバンを手に学校を出て近くのコンビニへ行った

「これ、飲んどけ」

やつが買ってくれたミルクコーヒーを貰って飲む。やつが先程の話始めた

「お前の周りの地面が暗くなって、急に倒れるから驚いたよ。波長があつたのか……守護霊がいなかったらヤバかっただろうな。なんか夢とか見たか？霊の夢とか」

「うっん、普通の夢だったよ」

「そっか……でも何だったんだろうなー、あれ」

私達は全てを解決出来るわけじゃない

「ま、あんな時間にテニスコートに行くやつなんていねえから、放つといても大丈夫だろ。帰るか」

ミルクコーヒーも飲み終わり、それぞれ帰ることにした

「七不思議の一つかー。他にはどんなのがあるんだろ」

「また調べるか」

「でも七つ知っちゃうと、ヤバいことになるって言わない？」

「まあ、もしそうなたとしてもオレら二人なら大丈夫だろ。一人にしねえから、安心しろ」

何だよ、今日は妙に優しいじゃねーか

私がやつを見なおしていると、いつもの別れ道に差し掛かった

そして出たいいつもの嫌な言葉

「倒れたあと、お前変な言葉喋ってたんだぜ。マジでダメかと思ったよ。じゃあな」

「だから……」

このタイミングで爆弾落とすの止めろっての！せっかく優しいって思ったのに！このときめきを返せー！！

私の胸中の叫びは、音にもならず虚しく消えていった

トイレの花子さん

「トイレの花子さんんー?!小学生じゃあるまいし、そんな女子トイレこの学校に……」

私はそこで口を閉じた。この友人がこんなくだらないう嘘を言う人間ではないことは、知っている

「あるの?」

目の前のやつは、ただ頷いた

やつは私に憑いているらしい守護霊をひどく気に入り、初対面の私に声を掛けてきた

やつは所謂見える人で、それまで見えたことのなかった私は、やつの影響か、強いものなら見えたりするようになった

そんなやつが、一年の教室が並ぶ四階の女子トイレに、花子さんが出ると言いだしたのだ

しかも……

「これは心霊調査部として確かめる必要があるな」

なんてことを言い出した部長に、反論は許されていなかった

「……いくら部活動で調査が認められてるからって、女子トイレに入るの？」

夜になり、例のトイレ前にやつと二人で立った。私はともかく、やつも入る気らしい

水のある所は、いるってよく言うし、ここは学校のトイレ。何かいてもおかしくない。しかも今は夜だ

何だか薄気味悪くて、中に入るかどうか逡巡していると、何の躊躇いもなくやつは足を踏み入れていた

「ちょっと……」

「何やってんだ？早く来いよ」

来いってお前な……その度胸、私にもあると思うなよ？っつーよりお前と一緒にするな

それでも、一人ポツンと突っ立っているよりは幾分かマシなので、やつについていくことを決め腹を括った

「順番にノックしていくぞ」

四つの個室が並んでいる。やつは、どこか楽しそうに手前の個室からノックした。返事はない

「次……」

独り言だろう。呟いて、やつは二つ目の前に立った。ノックするが、返事はない

そして問題の三つ目の個室の番になった

「なあ」

やつが突然話し掛けてきた。ノックすると思っていた私は、ちょっと拍子抜けだ

「返事があつたら、どうする?」

考えていなかった。返事のその後なんて

答えに窮していると、やつは言った

「首絞めの有名な話、知ってるか? あれ、言ってみようと思ってるだ」

何して遊ぶ? という問いに、首絞めと言うと首を絞められるってやつか

「死にたいの?」

「いや? オレは確かめただけだよ。こんなことで死んだらバカみたいじゃないか」

本当に絞められたらどうすんだ、なんてのは置いといて、私はやつの言葉を口の中で呟いた

そうしているうちに、やつはノックを始めていた

「はい」

幼い女の子の声だった

だが、何故か耳鳴りも嫌な汗もかいていない。少しの驚きだけだった

やつがドアを開ける

女の子は、確かにそこにいてやつを見ていた

怖いとか、そういうのは感じなかった

「一緒に遊ぼう」

やつが言った

「何して遊ぶの？」

噂通りの展開に、息を呑んだ

「首絞めごっこ」

やつならやりかねないと思った。宣言どおりに、私の目の前でやつは花子さんなるものに言った

だが、ここから噂と違っていった

花子さんは私を見た

正確には私の肩の辺りにいるらしい守護霊を

「私は、しない」

そう言っただアが閉まり、彼女は見えなくなった

私達は顔を見合わせ、帰ることにした

やつがドアの前を通った時、声がした。その声を最後に、二度と花子さんを見ることはなかった

「きつとお前に守護霊が憑いてたから、殺されなかったんだ」

帰り道、やつが言った

「確かめたいことは、何だったの？」

「花子さんがいるのかどうか。それと、花子さんは人を殺すのか、人を守るのかどうか」

「守る？」

そんな話は聞いたことがない

「悪霊から子ども達を守る霊って説もあるから」

「ふうん」

そして別れ際、いつもの余計な一言がやつの口から出た

「三つ目のドアの前を通った時、キミだけなら遊んだのって言われたよ。じゃあな」

いちいち教えてくれなくて良いのに。しかもこのタイミング……わざとだ

小学生くらいの赤いスカートをはいた女の子の噂は、それ以来聞かなかった

閉鎖された教室

私はやつと一緒に、隣校舎の一階にある閉鎖された教室の前に来ていた。隣には、同じく閉鎖されたトイレがある

閉鎖された理由は、使用者が少ないことや場所柄、不便であり来ない所であること、物置としての場所確保の為である

「と、言われてる。だけど、それだけじゃねえな」

「この廊下、いつも薄暗いし来たくないんだけど」

「ここ……確実にいるな……」

そうやって、楽しそうに笑うのはやめてほしい

「入るの？まだ放課後になったばかりだけど」

「何の為の鍵だよ。頼み込んで借りてきたんだ。入らねーと意味ねーよ。……夜に入る気はないしな」

「え？」

聞こうと口を開いたが、やつは教室の鍵を開けて、さっさと足を踏み入れていた

全く……自分勝手というか何というか

溜息を一つして、私も中に入った……のだが

「どうした？」

やつが後ろにいた私の異変に気付いて振り向く

私は、声を振り絞った

「何……これ……よく入った、な……」

一歩足を踏み入れた瞬間、激しい頭痛と耳鳴りに襲われ、冷や汗を全身かいた。寒気がする

「お前、もしかして波長が合うんじゃない……」

「は、ちょう？」

ドア前でしゃがみこんだ私に心配して、近づいてきてくれたやつの背後に、何かが見えた気がして息を呑んだ

やつも何か気付いたらしく、振り返る

「ここ、科学実験室……水もあるし、閉鎖された空間。おまけに学校か……」

ヤバいのがいてもおかしくないな………そう言ったやつの呟きが、一層恐怖を煽った

「取り敢えず、一旦出よう」

やつの提案に頷いて、力の入りにくい足を叱咤し、立ち上がった

やつがドアに手を掛ける。私はやつの後ろに立っていた

「つくそ！」

「？」

「閉じ込められた……」

それはつまり、ドアが開かないということ

鍵がかかっているとかいないとか、そういう物理的な話ではない
わけで

私は冷や汗をかきつつも、妙に冷静に状況判断が出来ていること
に、正直驚きを覚えた

勿論やつがこれくらいでテンパる人間でないこともわかっている

「窓もダメだろうな。……守護霊も流石にいつもの飄々とした顔が
崩れそうだぜ」

お姉ちゃんって、いつもどんな顔してんだ？

「こんな時のシルバーアクセサリーと水晶と金属バット」

「待て、何で金属バット……」

というか、どこに持ってたんだ？

「まあ、いろいろ試させろって」

そう言っで、思い切りバットを振り回し始めた

ドアとぶつかり、嫌な音が響く

この外にはまだ生徒や先生がいる時間のはずなのに、今が何時なのか全くわからない

ドアはへこみはするものの、壊れない

やつは少しして、埒があかないとみてバットを下ろした

「ダメか……じゃあ本人に話でも聞くか」

「本人で……」

「まさか、あんな強いのが見えてないわけないよな？」

「嫌でも視界の隅にちらついてるって」

ずっと見えないフリをしていた、視界の隅に見える黒い影

その場から動くことなくこちらを見ていた

「なあおい、オレらをどうする気だ？何を望んでいる？オレらに求めてんだろ？」

やつはその黒い影に話し掛け始めた

ホントに話し掛けやがった、なんてツツコミはしまっておこう

私は黙って、ただ見ていた

黒い影は、やつではなく私を見ていた

私の肩の辺りを

恐らく守護霊を

黒い影に目があるかどうかなんて、わからないけれど

「……うーん」

珍しくやつが困った顔をした

「たぶんオレには、出来ないんだよね……」

「何が？」

やつは私を一瞥し、溜息をついた

「この霊、ずっとこの教室にいるんだ。閉鎖されて、人もこなくなつて……何か、この場に留めてる何かがあるはずだけど」

「……寂しかったの？この場に、一人で……」

「……一人で、か。人扱いすんだな」

私は、やつを見た

すぐに、言われたことを理解できなかった

「いや、さ。そういう考え、オレわりと好きだぜ。さ、探しにかか
るか」

やつはこの空間で自由に動けるらしい

私はこんなに汗をかいているというのに

やつは黒い影の周りを重点的に何かを探し始めた

「そこを、探せばいいの？」

私が動こうとしたら、やつが首を振った

「お前、しんどいんだろ？ いいよ、そこにいろよ。たぶんすぐ見つ
かるし」

「何だよ優しいな。気持ち悪っ」

「ひでえな」

そう言ったやつの笑顔に影が差した、気がした

「お前……」「あつた！これだ」

やつの手には、お札のような紙切れがある

よくわからない文字が連なった白い紙だ。絵のようなものも書か

れている

どうするのかと見ていれば、やつは躊躇いもなくビリビリに破き、別の白い紙に包んでバケツを用意し始めた

「どうすんの、それ？」

バケツに水を入れながらやつは答える

「まあ見てろつて。止めんなよ？」

やつはバケツを置き、今度はマッチを取り出した

ここまで来たら、私にだってわかる

やつは白い紙に火を点けた

「これでよし、と」

不適に笑んで、燃える紙をバケツへ放る

「さ、お前の番だぜ」

急にそんなこと言われても……

「何をしろと？」

半眼で問えば、クスツと嫌味に笑って、やつは言った

「伝えてやればいいんだ。もう自由だってな。守護霊つきのお前か

らの方がいいだろうしな」

「……わかった」

不本意ながらも、やつが言うことは間違いがないので従う

私は近付けるだけ黒い影に近付いた

「もう縛るものは無くなったんだよ。もう自由だから、行きたいところに行けるよ」

そう言った瞬間、黒い影が嬉しそうに笑った、ような気がした
嫌味のない、清々しい黒い影との別れだった

「私達、三時間もいたの？」

教室を無事出ると、すっかり夜になっていて

私達は急いで、学校を出た

「経ってても一時間だと思っただけだな」

これも霊体験から起こることなのか

そう思いながらやつに訊ねたのだが、返事はなかった

「……。あの紙、何だったの？」

「おれみたいなもんだ」

何だか、やつの歯切れが悪い

そう思っていると、やつがふと足を止めた

「お前、気分とか大丈夫か？」

かと思えば珍しく心配された

「え、うん。別に、普通……優しいと、マジで気持ち悪い」

「せっかく心配してやったのに。ま、いいや」

そして、別れ際。いつものやつの悪い癖が出た

「封印の護符の処理法、当ってるか自信ないんだよな……じゃあまたな」

間違ってたなら、後々いろいろ問題があるんじゃない……怖い事言うなよなー、本当に！

やつの歯切れの悪さも気になるし、あの教室に入った時の嫌な感じはまだ覚えているしで、私は溜息を零さずにはいらなかった

鏡

「何でこんな所に鏡なんてあるんだろ、この学校」

何気なく呟いたその言葉は、やつの耳にしっかりと入り記憶されてしまったようで

とある日、とんでもない目に遭う羽目になった

ホント、口は災いのもってこと？

「今日暇か？放課後付き合えよ」

「は？何いきなり」

「鏡の謎を説明しに」

私の顔が引きつるのをやつは気にも止めずに、続ける

「心霊調査部、仕事するぞ」

「……マジ？」

階段の途中に置かれた、古い鏡

前に立つと、全身はゆうに映る大きな鏡で

少しひび割れた所はあるが、身だしなみを整えることは出来る

問題なのは、設置されている場所

滅多に人が通らない、教室棟の一番端の三階から四階へ向かう階段の真ん中

三階にも四階にも、近くにはトイレがあるがあまり使われない

付近の教室は、選択教科専門教室であり使われない

その四階の一番端の教室は、私達心靈調査部の部室でもある

つまり、私達はいつもその鏡の前を通っているのである

「何あの鏡って曰く付き？いつもあの階段使ってたけど？！」

「知らなかったのか。お前なら気付いてるかなーって思ってたんだけどな。まあ、いいか」

「良くないよ」

いつもの不適なくせにどこか飄々とした態度

全く、いつものやつらしい

「お前の守護霊が、鏡をいつも睨んでんだよ。それに、鏡に映ってたしな」

「お姉ちゃんが？」

「やつは見えねえのか……。あ、そうそうあの鏡だな、いつからあるのか、何故あるのか一切不明だ。いくら調べても出てこねえ……面白いだろ」

面白がれないって……。同じ神経してると思うなよ?!なんて思っている、予鈴が鳴った

この話に貴重な昼休みを潰されたようで、複雑な気分になった

「合わせ鏡でもやってみるか？」

「やるなら勝手にやれば？私は見てる」

放課後、人がいい私はやつと鏡の前にいた

「わかってねえなあ。お前がやる方が良いに決まってるだろ？」

な？と笑うやつの目は笑っていない

不適な笑みなのに、今の表情からは恐怖さえ感じる。しばしば私
がやつの言いなりになるのは、本能が従うことを選ぶからだ

私っていつも貧乏くじ……

まあ、やつに対して強気に攻められる人間を見たことはないけどね

「聞いてるか？」

聞いてなかった

「ごめん、何？」

「五時五十五分になったら、始めるからな。それまで部室行こう」

私は取り敢えず頷いて、部室へと向かった

「まだ時間あるな……」

私が、時計を見ながら言う

やつは同じように教室の時計を見ながら、椅子にもたれかかった

「四時四十四分も試してみたかったなー。ま、取り敢えず五時台だな」

「何なの、その不吉そうな時間は」

後向きに座りながら、やつと向かい合う

私は半眼で訊ねた

「ん？やつぱそういう時間の方が出やすいだろ？一番いいのは夜中の三時だけだな」

「んな時間に出会いたくないよ」

「オレも」

本当かよ、と胸中で思いながら苦笑する

「合わせ鏡するの？」

「取り敢えず、前に立つだけ。何もなかったら合わせ鏡でも何でも、いろいろやればいい」

「他人事みたいに聞こえるぞ」

「言っちゃまえば他人事だよ」

反論の言葉は山ほど喉元まで来ている

だが、こいつは何があっても私を助けてくれる。そういうやつだ

知識、度胸に力。加えて曲がりなりにも友達だ

こんなやつだが、私はやつを信頼している

「さ、五十分だ。そろそろ行くか」

立ち上がるやつの後ろについていきながら、私は柄にもなく緊張していた

鏡の前に立つ

時間は三十秒前

「何かあればすぐ言えよ?」

やつが真剣な顔で、鏡に映る私を見る

全く格好良い顔してやがるな、なんてどうでもいいことを考えていると、時間だと告げられた

途端、私は目を疑う

「あれ?」

「どうした?」

「鏡が……水みたいに」

ぐにやりと鏡は平面を失い、波紋を生み出した

やつにも見えているようで、息を呑む気配を感じた。鏡はもう、本来の役目を果たさない

「誰か、いる……」

私の呟きに、やつが咄嗟に私の左手首を掴む

「連れて行かれんなよ?!……ま、その時はオレも一緒だ。お前だ

け行かせねえよ」

「……お前、格好良すぎんだよ、バカ」

鏡は再び平面を取り戻し、人を映した

だが映すのは私でもやつでもない

知らない、人かどうか定かではないモノを映していた

□

□

「え？」

幼い少女が手招きをして、何かを言っている

言葉は聞き取れないほど小さい

□

□

唇が同じように動く。先程と同じことを言ったようだが、聞き取れなかった

私はその言葉が気になって気になって仕方ない

無意識に鏡に近づいていた

「おい！不用意に近づくな」

やつが制止の言葉とともに、左手首を強く引っ張った

ね

「?! 今なんか聞こえ……」

やつの制止も構わず、更に鏡に近づいた

途端、私は青ざめる

「死ね」

ね死ね死ね死ね死ね死ね

鏡の向こうの少女の口が、裂けたように笑う

にゅつと伸びてきた白すぎる手

それは明らかに鏡の中からで

私は言葉を失った

「っのバカ！」

やつの怒声に我に返り、思いきり引つ張られてバランスを崩し後ろに倒れた

「何やってんだよ！連れていかれてえのか？！」

「あ、あはは……ありがとう」

乾いた笑みを浮かべながら私はやつに礼を述べる

立ち上がり、やつの隣に並んだ

少女はこちらを見て笑っていた

白い手は、もう鏡の中にあつた

いつのまにか、少女は消えていた

鏡は私達を映している

「消えた……」

呟き、詰めていた息を吐く

「ありがとう、マジでヤバかったよ」

素直に言つと、やつはクスツと笑つた

「ああ。流石に今のは守護霊もヤバそうな顔してたぜ？ま、何はともあれ良かったな」

それから私達は部室に戻り、カバンを手にしてから一緒に帰つた

「呪われたり取りつかれてなかったらいいな」

「お前……そういうこと言つたの。笑えないから」

いつものように、楽しそうにやつが笑う

私は不機嫌そうな顔をしつつも、この会話を楽しんではいる

「守護霊いるから、お前は大丈夫だよ」

そのための守護霊だろ？なんて、やつが言うが私にはよくわからない

「お前さ、何だかんだ言って運良いほうだろ？」

「んー言われてみれば、そうかも」

運の良さも守護霊が関係しているのだろうか？

そう思っていると、分かれ道に差し掛かった

「じゃあまた明日な」

「うん！」

帰ろうと足を踏みだしたその時

「あ、あの鏡さ」

「……何？」

やつが不適に笑う

嫌な予感がする

「お前先行って気付かなかったみてえだけど、また映ってたよ」

「……へー」

何が、とは聞かない

聞きたくもない

だが、足は何故か動かない。動こうとも思わなかった

「例の少女が血まみれでこっち見てたぜ。じゃあなー！」

今度は別の意味で固まってしまった

「やつはお前なんて嫌いだー！ふざけんなー！」

やつは笑いながら後ろ手を振った

私は暫く半眼で文句を並べていた

もう絶対あの鏡の前は通らないと誓って

家

「何だ、溜息なんか吐いて」

「うーん……何かしんどいんだよなー」

何でかなー、と私が呟いていると、やつはいつものようにさり気なく爆弾を落とした

「そりゃあ、んなもの肩に乗せてたら疲れるだろ」

「あーもう！あの野郎っ！聞き流すトコだったじゃねえかよ！……あーもう、ホント聞き流せば良かったー」

嘆きながら、自室のベッドに転がる

教室でやつに言われた言葉が、頭から離れない

——肩に、無表情の人間霊が黒い塊漂わせて憑いてるぜ

自分で見てもわからなかった

あれから余計に肩が凝る気がする

「はあー……」

溜息を吐き、ぼんやりと天井を見つめる

今晚、私はやつに会いに行くことになっていた

この霊をなんとかするため

守護霊がいるのに何で？と聞いたら、それ程害のあるものではないからんじゃないか、と言っていた

そんなもんなのかな？

私は起き上がり、ケータイを引っ掴んで家を出た

向かうはやつの家

「お、来たな。遠慮せずに上がれよ」

「お邪魔します」

「仕事で誰もいないんだ。今はオレだけ」

「そうなんだ……」

……ん？やつだけ？それって……！

ふ、二人きりっ！？

「何百面相してんだ？」

やつの苦笑混じりの声に我に返った私は、恥ずかしさから顔を背けた

「別に……にしても、凄い家だな」

普通の一軒家なのだが、私みたいに見える人には普通の家ではない

「うじゃうじゃしてるだろ」

「笑い事かよ」

通り道なのか、呼び込むのか……霊で犇めきあっていた

「害はないから平気だつて」

「でも、あの部屋……」

廊下の奥

異様な気配がする

「あー、あれね。気付いたか」

やつがクスツと笑う

「最近寄り付いた、ちょっと厄介なやつ。あれのおかげで低級霊が減ったよ。皆逃げていくんだ……ほら、お前に憑いてたやつも離れてる」

「そつえば、軽くなったような……」

「他のやつ憑けねえように気を付けろよ」

その言葉にうんざりする。もう憑かれるのはごめんだ

「つか、厄介なやつって？」

「見に行くか？」

怖いもの見たさに頷いた自分に、後悔することを今は知らない

「被えないのか？」

「オレそんな力ないし」

「何かお願いしてだよ。専門家に！」

そこまでお前のこと買い被ってないから、と言いつける

「別にこいつ何もしてねえからな」

やつの呟きに、優しさを垣間見た

こいつは、興味本位で滅茶苦茶なことを考え付くが、霊達全てに
容赦なく切り捨てるような概念を持たない

人間を相手にするのと何ら変わりなく接するのだ

化け物だとは決して思っていない

そんなやつの優しさが、私は好きだ

勿論人間性の話である

「でも、強そうな霊だな……」

「強いから低級が逃げてんだろ」

「ふーん……」

「この部屋は物置で、あんまり使わねえんだ」

「使わない部屋……」

「寄りやすい家だしな」

霊にとって好都合な家

そんなとこ住みたくなえ……！

「見えんのオレだけだしな」

「え？お前だけ？」

「そ。だから面白そうだし放ってんだよ」

見えてることを、こいつは誰にも言っていないのではないかと思
った

私だって、誰にも言っていない

私の家族も見えない人達だから

「じゃ、閉めるぞ」

「あ、ああ」

閉める瞬間、垣間見た霊の顔に、表情を見た気がした

ちよつと悲しそうな表情を

それをやつに言ったら、笑われた

「まあ、わからなくはねえよ」

「じゃあ笑うなよ」

「ただ、やっぱり雰囲気は読めても、表情は読めねえだろ、あの霊は」

「そう思っただから、仕方ねえだろ」

そう。あり得ないことくらい自分にだってわかる

ただ、そう感じたのだ

あの霊に顔がなくても

「さあ、今何時でしょうか？」

「何時って……さっきここに来たばかりだから、まだ七時くらいでしょ」

言いながら時計を見て固まった

経っても一時間くらいだろう

だが……

「く、九時?!」

驚愕する私の隣で、やつがクツクツと喉で笑う

ちょっとム力つく笑い方だが、やつがやると何故か格好良いから、またム力つく

「持ってかれたな、時間を」

「一緒に見に行ったんだよね?」

もしかしたら、今体験した記憶まで霊に作られたものだったのではないかと、不安になった

「安心しろ。お前の記憶は確かだ」

「そっか、そうだね」

やつにそう言われると、安心する

「じゃあ、もう遅いし、帰るよ」

「ああ、それが良い」

やつは、いつもの分かれ道まで送ってくれた

「別に良いのに」

「遠慮すんなって」

強がっている私を気遣っているのかはわからないが、そんな雰囲気だった

「怖かったか？」

「誰が」

「強がんなよ」

左手を掴まれた

「冷たくなってんぞ」

「煩い、離せ」

振り払い、凶星を気取られぬよう顔を背けた

「じゃあな」

いつもの分かれ道

私は礼を述べて、背を向けた

「ああ、またな……守護霊がくつついていて良かったな」

「え？」

「守護霊が離れかけてたんだよ。オレの家には来ない方が良かったな」

「なっ……」

「じゃあな」

やつの自転車が遠ざかっていく

私はその場に立ち尽くしていた

本当に

「疲れた……」

旧校舎

「夏休み、合宿するぞ。場所は旧校舎だ」

「はぁぁぁー?!」

それは突然決まったことだった

「何で来てるかなー私」

やつに逆らったら呪いでもかけられそうで。それにやっぱり好奇心にも勝てず、私は夏休みに部室に来ていた

その本人は、目の前で荷物を広げている

「部屋を私物化するつもりかよ」

たった一泊二日でその荷物は何なんだ?と思いながら、呆れ顔を隠しもせず見ていた

「大体さ、どうやって許可取ったの?」

「ん?別にこの学校、宿泊禁止じゃねえだろ?野球部とか柔道部も合宿してるし」

確かに、そういう簡易の施設は整ってるよ、この学校

「そうじゃなくて、ほら、私達二人だけだし」

「先生も職員室にいるから、二人だけじゃねーぞ。お前の姉ちゃんもいるしな。それに、お前なんか襲わねーから安心しろ」

あーそうかい。よくわかりましたよ

「で？泊まるのはこの部屋？」

「他にどこがある？」

「聞いてみただけ。ったく……」

やっぱり来るんじゃないかった

「さて、行くか」

旧校舎へと歩いていくやつの後ろを、不服ながらも私はついていった

「げー不気味ー」

「取り壊せない旧校舎か……最高だな」

何楽しんでんだよ、バカ。全く……一人で勝手に行けよなー

そうは思っても、やっぱり気になるし、心配だし。お姉ちゃんがいるから助かった、なんてことあったし、やっぱり私が一緒の方が

少しはマシだからね

本当は行かないのが一番なんだろうけど、それはやつには無理な話だし

私達は、何故か取り壊せない旧校舎へと足を踏み入れていた

「ギシギシいつてる」

「足元、気を付けろよ。床抜けるかも」

正面玄関から入り、一階を見て回る。古くてボロボロだが、二階建ての木造の学校は至って普通だ

「上、行くか」

「あ、待ってよ」

こういつとこ自分勝手っていうか……気遣いなく、ずんずんずん進んでくれちゃってさ

「一、二、三……」

しかも階段数えて上がってやがる

私も何となく数えながら上がってみた

「十、十一、十二つと」

十二段なのかーと頭の隅で思いながら後について上る、と……

「十一、十二……十三?! え? あれ?」

「……何やってんだ?」

「こ、ここ十三段ある! 十二じゃなくて、十三だった!」

「まあ落ち着け」

これが落ち着いてられるか! 階段が一段増えたんだぞ

「なあ、一番上二回数えなかったか?」

やつが言いながら下りてきた

「へ?」

「来いよ、一緒に上ってみようぜ」

やつが私の横を通り過ぎながら、いつもの不適な笑みを浮かべて言う

訳が分からないまま、私はやつと並んで階段の一番下に立った

「行くぞ、」

やつと一緒に一段ずつ数えながら上がっていく

「十、十一、十二」

「ん？」

「そういうことだよ。増えたんじゃない。オレらの数え方が違ったんだ。わかったか？」

どうやら私は一番上の段を左足で踏み、右足で踏んだ時も数に入っていたらしい。無意識に

だから、結果的に一番上の段を二回数えていたことになる

「わかったらさっさと行くぞ」

言いながら上がっていくやつの顔が、少し笑っていて。私は恥ずかしくて、少しムカついた

悪かったな、騒いで……！

また数えながら上るやつを後ろから半眼で睨む

もう絶対数えながら上らないからな

大体、何で数えるかなーなんて思っていると、振り返ったやつと目が合った

「な、何？」

「いや？何か……さっきのお前面白かったなーって思ってたさ」

んなつ……！っこの野郎……

笑いを堪えるようにしながら、それを隠しもしないやつに頭に血が上るのを感じた

「まあまあ、頭冷やせよ。対処に遅れんぞ」

「はあ?! 何言つて……っ!」

嫌でも頭は一瞬で冷えた。二階に上がった瞬間だ

まるで地面が揺れたかのような衝撃

違う世界に来たかのような錯覚

「ここは、一体何処だ?」

「おいおい、呑まれんなよ? 始まったばかりだぜ」

「んなこと、わかってるよ」

異様な空気

ここには何かが沢山いるはずなのに、何も見えない。いると分かっているのに、いないみたいで……何だか

「気持ち悪い」

「いないな……隠れてるのか? それとも……」

出られないのか?

やつがボソツと呟いた言葉の意味が、その時の私にはわからなかった

「はあー……」

私達は部室に帰って来ていた

近所のコンビニでお昼ご飯を買って食べ、今は夕方になるのを待っている

結局、旧校舎の二階では何もおかしな事には遭遇しなかった

やつはあれから口数が減った。こんな時は何か考え事をしている。私は暇なので、持ってきていたデジカメで写真を撮っていた

「何だ、お前。カメラ持ってきてたのか」

「何？やだよ、旧校舎には持ってかないからね」

「じゃあ何のために持って来たんだよ」

まるで旧校舎へ持っていく以外あり得ないというような口振り

「少なくとも心靈写真のためじゃないし」

私はそついう写真とか画像がダメなんだから！文章ならともかくさ

「チツ……まあ、いいか。こっちの校舎でも」

「何か言った？」

てゆうか、舌打ちしただろ……

「何でもねーよ。さ、寝るか」

手際よく寝袋を広げ始めたやつに、半ば啞然としながら口を開いた

「寝るの？」

「寝るよ。暇だし、今のうちに寝とかねーと」

つまりそれは何だ？夜遅くまであの旧校舎に留まる予定なのか？

「行くのは夕方でしょ？こっちに戻ってからでもいいじゃない」

「何かあるかわかんねえからな、一応だ。それに暇だし」

暇暇言っとなつての

そしてやつはそのまま宣言通り、私を置いて寝入ってしまった

「さて、そろそろか」

「ん……」

「起きたか。良いタイミングだ」

「あれ……寝てた？」

どうやら、いつの間にか寝ていたらしい。気付けば机に突っ伏していた

時計を見れば、四時半になろうという時刻。ここを再び出る予定の時間だ

「置いてくぞ」

「あ、待ってよ」

ケータイを引つ掴んで部屋を飛び出す。やつは階段を下りていた

「待てっつーの」

私はやつの後を追いつけた

四時四十分

私達は再び旧校舎へ来ていた

一階には、変わらず何もない。朝の時と同様に、静まり返っている

私達は階段を上り、二階へ向かった

二階へ足を踏み入れたその瞬間

四時四十四分

目の前に突如、異様な光景は広がった

「何、これ……」

「四時四十四分……ぴったりか。すげえな」

朝には見えなかったモノ達が、今は見えていた

「雑魚……だな」

雑魚って……せめて低級って言えよ

まるで、普通の休み時間の学校風景かのように、そこにはたくさん
の霊がいた。彼らに足があれば、異様ではないだろう

「おい、こっち来てみるよ。授業してるぜ」

楽しそうなやつの声に誘われて覗いた教室では、霊達が授業をして
いるようだ。先生らしき着物を来たおじさんが教壇に立ち、何か
を言っている

「あはは、面白ー」

心の底から楽しそうなやつの声に半ば呆れながら、廊下を歩いて
いく

どうやら強い霊は、ここにはいないようだ

「堂々と闊歩してるけど、大丈夫なのか？」

「お前の姉ちゃんが一緒だから大丈夫だよ」

だからって、廊下の真ん中歩くなよ

「丁寧に避けてくれる霊にちよっぴり同情

「なあ、何処に向かってんの？」

「嫌な気が流れてる方」

上級に会いに行く気か？それとも、取り壊せない原因探しか？…
…両方だろうな

「……………、なあ、ここって廊下こんなに続いてたっけ？」

ひたすら歩いてたけど、何か変だ。いつまでたっても突き当たらない

「こんな長いわけないだろ。どんな広さだよ」

知るかよ

「ぐるぐる同じとこ歩かされてんだよ」

「そんなの、呑気に言っつなよ」

「ただ歩いてるわけじゃねーよ。探してんだよ、鍵を。どこかにあ

るはずだ。時が進んでいる場所が」

時が進んでいる場所？

首を傾げつつ、きよろきよろと辺りを見回す

ふと、音楽室の時計が目に入った

他の教室とは違う時を刻んでいる

「あの時計、他と違うよ？」

「何であれが違うってわかるんだ？時計はどれもバラバラだろ？」

言われて、だってと左手首の腕時計を見せた

「私のと一緒の時間だから」

「……お前の時計、狂ってねえのか？！」

やつが驚きながら、自分のケータイを見せてきた。待ち受けの時計は、ぐるぐると次々に数字が回っている。私は開いた口が塞がらなかった

「とにかく、音楽室に行くぞ」

ずんずん進んでいくやつの後についていき、私は音楽室へ足を踏み入れた

「うわ……」

「この曲……シヨパン？次はベートーヴェン」

やつは意外に音楽に詳しいらしい。つか、誰が弾いてんだよ、誰が！？

「てつきり霊が弾いてるかと思えば……ピアノか」

「誰もいない……」

よくわからんが、ピアノが鍵盤を叩いているらしい。霊が弾いてるのではないんだと

「さて……」

やつは手近なイスを時計の傍へ運ぶ。まあ、そのままじゃ届かねーもんな

「よつ、と」

イスに乗り時計を外す。イスに近付き、私は時計を覗き込んだ

「普通の時計だけど」

「これ持ってまた廊下歩くぞ」

「え？何で？」

「歩けばわかる」

そう言ってスタスタ歩いていくやつ。ホント勝手だなあ

「何やってんだ。オレから離れるな」

「えっ……」

ついていかなかった私に気づき、やつが戻って来てくれた。しかも私の手を握って歩きだす

「ちよっ……」

「時計から離れると迷子になるからな」

あー、そうですね。そうだろうと思った

「何怒ってんだ？」

「怒ってなんかない！」

「変なやつ」

ちつとも嬉しくなんかないんだからな。手を繋いだからって、そんなわけない。気のせいだ、気のせい。ドキドキなんかしてないぞ、本当に

「あ……」

さっきまで同じ所をぐるぐる歩かされていた廊下は、今度はきちんと突き当たりが現れた

「やっと端っこに辿り着いた」

「こここの階段で上に行くぞ」

「上？」

てことは……

「屋上……」

「ほら」

手を引かれ、階段を上がる。十三階段だった

「ボロい……」

「くっ……」

やつが扉に手を掛け、力を入れた。ギイという音がして扉が開く

「え……」

辺り一面宵の闇。夜の帳に覆われた漆黒の空に月だけがその存在を光らせていた

「嘘……もうこんな時間?!」

「やっぱり狂わされたか……」

体内時計は、六時頃だと告げている。不正確だったとしても、夜

中の二時では決してないだろう

「何時間校舎にいた？」

「いても二時間だな」

いつの間に九時間も経っていたというんだ

「で？屋上に何しに来たんだ？」

早く帰りたい

「取り壊せない理由があるんだ」

「ここに？」

「ここに」

「……何でわかるの？そんなのどうやって……音楽室内でのこともそうだった。鍵とか、何で時計だとわかった？」

何かがおかしい。何故かはわからないけど、そんな気がする

「そんなことより、これ見ろよ」

「え？」

「ほら、早く」

やつに手を引かれて半ば無理矢理連れていかれる。屋上の端ギリ

ギリの所で、気を付けないと落ちてしまいそうだ

「もっと近付かないとわからねーぜ？」

「え？これ以上は……」

私が渋っていると、背後で扉が開いた。びつくりして私は振り返る。そこにはやつが肩で息をしながら立っていた

「え？何で……」

だってやつは今さっきまでここに……

「やっと見つけた……」

その場にしゃがみ込んだやつの傍へ駆け寄る

「え？あれ？さっきまで、傍にいなかった？」

「何言ってるんだ、お前。もう六時間前からオレ達バラバラだったじゃねーか」

「うそ……じゃあ、あれは」

誰だったの？

「気付いたらお前どこにもいなかったから、焦った……校舎中走り回って、携帯も繋がらないし。そしたらお前の姉ちゃんが飛んできたんだ。お前が一人で屋上に向かってるってな。まるで誰かと一緒にいるみたいに独り言を言いながら」

「そんな……私はずっとあんたと一緒に……」

「やられたな……んなことが出来るやつがいんのか……でも、良かったよ。無事で」

「えっ、あ、うん……たぶん、もう少しで危なかったよ私」

苦笑しながら言えば、やつは怪訝な顔をした。私は続ける

「屋上の端っこに連れていかれてさ、もう少しで落ちるところだったから」

ふいにやつが視界から消える。遅れて、抱き締められていることに気付いた

「んなっ……!」

「ごめん……怖かっただろ？」

私はその時やっと気付いた。頬を伝う暖かな滴に

「やだ、私……泣いて……」

「大丈夫だ。もう、大丈夫だから……オレの傍からもう二度と、離れないでくれ」

「うん……」

私、怖かったんだ。やつと一緒にじゃなかったことが。嬉しかった

んだ。ずっと探していてくれたことが

暫くして私が落ち着いた頃、やつは屋上をうろろし始めた

「あつたあつた」

どこから持つてきたのか、やつの手には人形があつた

「えっと……ひとがた？だよね」

「ああ、人形だ。こいつは、呪いに使われたみたいだな……きちん
と後始末しなかったんだな」

「呪い……」

やつは人形を白い紙に包んだ

「後でちゃんと後始末してやるか。さ、帰るぞ。んな汚い壊れた時計は捨てていけ」

「え？」

改めて見た音楽室の時計はボロボロで。こんなものをずっと持っていたのかと思うと、気持ち悪かった

「ほら、行くぞ」

「ん？」

やつが手を出してくる

「また離されたら面倒だ。これなら迷子にもならねーだろ？」

「う、うん……」

手をそつと出すと、ギュッと掴まれた。暖かな体温に、何だか安心する

「ありがとう」

「何だいきなり……」

「まだお礼言ってなかったから。六時間も走り回ってくれたんだよね」

「オレが……」

「ん？」

「オレがいないと、お前はダメだろうが。それに、無理矢理付き合わせておいて、怪我させるわけにはいかないし……」

私達はいつの間にか旧校舎の玄関にまで戻っていた。帰りは早いなあ

「何か、齒切れ悪いなあ……言いたいことがあるなら、言ったら？」

「……っ。お前はオレが守るって決めたんだよ！」

え？守るって……

握る手にやつは力を込めてきた

「これからは部活中は手握るからな。はぐれないように」

何だそれ。こいつ、滅茶苦茶不器用だな。意外だ。でも可愛いな、くそ

「仕方ないから守られてやるよ。だから、手離すなよな？」

私も似たものか。照れ隠しに何言ってたんだか。あ、やつが笑った

「ホント、面白いよお前は」

「笑うなよ、ム力つく」

そんなことを言いながら、私達は部室へと戻った

後で聞いた話だが、二階の廊下をぐるぐる回っている時辺りから、離れ離れになっていたらしい

今となってはどうでもいいことだ

それよりも今は別のことにショックを受けている

「何やってんだ？」

部室の机に突っ伏していた私の背に凭れて、やつが私の手元の写

真を手にとった

「重い……」

「へえー……やっぱりお前が撮っただけはあるな」

早く退けよ

「これオレにくれよ」

「要らないからあげるから早く退け」

そう言えば、やつは写真を楽しむそうに見ながら離れて歩きだす

何がいいんだか心靈写真なんて……

「これ、合宿ん時撮ってたやつだろ？」

「そつだよ」

学校内を何となく撮って、現像したらあちこちに霊が写ってましたとさ。学校なんかで撮るんじゃないかった……！

「そう言えば、旧校舎取り壊すんだってさ」

「へえー」

「今度は本当に取り壊されるんだろうな……なあ、もう一度行かないか？旧校舎」

「行かない」

何考えてんだこいつは

「ふーん。じゃあちよつと行ってくるよ」

そう言ってスタスタと歩いていくやつの制服の袖を、私は咄嗟に掴んだ

「何だ？」

「わ、私のお姉ちゃんの力があつた方が安全だろ。仕方ないからついていってやるよ」

「さんきゅ」

やつは私の手を取り歩きだす。ム力つくから私はギュッと握ってやった

離してなんかやらないからな、バカ

「今度は校外活動もしようぜ。近くに面白そうなスポットがあつてさ」

「え……」

やっぱり離してくれ

「オレの傍から離れんなよ？」

その笑顔反則！

「もう……わかったよ部長」

結局、私はやつと一緒になんだろうな。何だかんだ言ってこの位置が気に入ってたんだから

「宜しくな、副部長」

「こちらこそ、部長」

心霊調査部は今日も二人で謎を追っています

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7583k/>

怪奇学園心霊調査部

2010年10月13日17時52分発行